

十一月 自主公演能

平成二十六年

とき 平成二十六年十一月二十三日(日)正午始

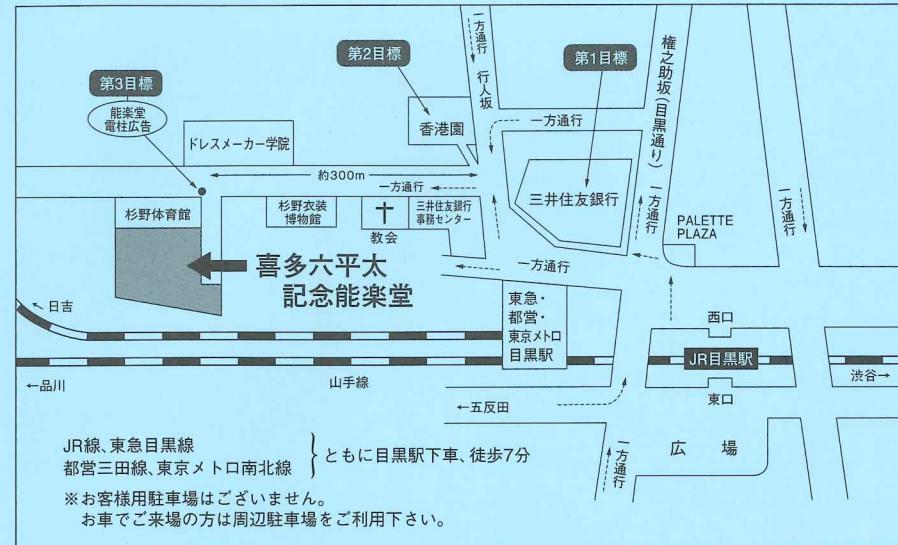
（整理券配布・十時三十分、

見所入場・十一時、解説・十一時十五分）

ところ 十四世喜多六平太記念能楽堂



【会場案内図】



『チケットのご案内』

十一月チケット発売開始日

平成二十六年十月二十六日(日) 午前十時より

年間優待券

- 十一枚綴り 五〇、〇〇〇円
●五枚綴り 二五、〇〇〇円

優待券は各職分でも受付をしております。

前売券

- 一般券 六、〇〇〇円
●学生券 二、五〇〇円
●学生団体(二〇名以上) 一、〇〇〇円

指定席料 二、五〇〇円

当日券

- 一般券 六、〇〇〇円
●学生券 二、五〇〇円

十二月自主公演能予告

平成二十六年

平成二十六年十二月二十一日(日) 正午始
十四世喜多六平太記念能楽堂

「俊成忠度」 笠井 陸

「龍田」 佐々木宗生

「项羽」 出雲康雅

十二月チケット発売開始日

平成二十六年十一月二十三日(日)
午前十時より

【ご注意】

*喜多流戲分会の許可なき写真・ビデオ撮影、及び録音はできません。また演能の妨げや他のお客様の迷惑になる行為もご遠慮ください。時計のアラームや携帯電話の電源は必ずお切りください。なお、迷惑行為を発見した場合や係員の指示に従つていただけない時は退場していただく事もございますのでご了承ください。

*2階ラウンジ以外でのご飲食は固くお断り致します。
*自主公演当日は午前10時30分より「整理券」(お一人様一枚)をお配りし、午前11時より整理券番号順に見所へ入場していただきます。

*チケットは入場前に半券を切り離すと無効になります。
*座席はお一人様一席です。入場の際手荷物等でお連れ様の座席を取り置く行為は固くお断り致します。

*公演日によつては、満席になり次第入場をお断りすることもございますので、あしからずご了承ください。

*公演中止の場合を除き、お申込後のチケットの払い戻し、変更、再発行はいたしません。

*やむを得ない都合により出演者が変更になることがあります。
*全館禁煙でございます。屋外喫煙所をご利用ください。

*お客様用駐車場はございません。お車でご来場の方は周辺駐車場をご利用ください。

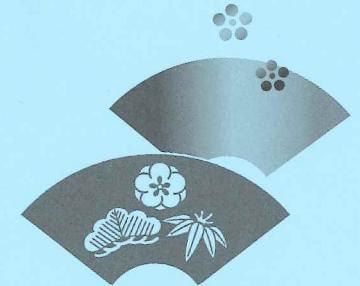
*貴重品の管理には十分ご注意ください。館内で起きました盗難・紛失につきましては一切責任を負いかねます。

『お取扱い』

窓口とお電話にて承つております。

(FAX 及びメールでのお申し込みは
お受けしております。)

十四世喜多六平太記念能楽堂事務局
(電話) ○三一三四九一一八八一三
(午前十時～午後六時)



十一月自主公演番組

平成二十六年十一月二十三日(日)正午始
整理券配布・十時三十分、見所入場・十一時
解説・十一時十五分

能

シテツレ・侍女 佐藤寛泰

シテツレ・小督 塩津圭介

後シテ・前同人 前シテ・源仲国

塩津哲生

小督

ワキ・勅使 工藤和哉

大鼓 龟井広忠
小鼓 観世新九郎

笛 一増幸弘

アイ・嵯峨の里人 河野佑紀

後見 高林白牛口二

松井 檜

地謡

谷 友矩
友枝雄人

佐藤章雄
長島茂嗣

高林呻二
香川靖嗣

佐藤陽
狩野了

アド・主 野村太一郎

佐藤章雄
長島茂嗣

高林呻二
香川靖嗣

佐藤陽
狩野了

狂言

咲嘆 シテ・太郎冠者 野村 萬

アド・主 野村太一郎
野村万蔵

咲嘆

シテ・太郎冠者 野村 萬

アド・主 野村太一郎
野村万蔵

休憩 二十分

咲嘆

シテ・太郎冠者 野村 萬

アド・主 野村太一郎
野村万蔵

能

後シテ・楓の精
前シテ・里女

粟谷明生

大鼓 國川 純
小鼓 大倉源次郎

太鼓 小寺真佐人
笛 櫻宅 聰

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

定作
定作

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々木多門
大村 大作

栗谷充雄
栗谷能夫

内田成信
内田成信

谷 友矩
谷 友矩

佐々

仕舞

大江山

松井 彬

地謡

栗谷 浩之
金子敬一郎
佐々木多門

能

後シテ・鬼女 前シテ・里女
大島輝久

黒

塚

ワキ・祐慶 宝生欣哉
ワキツレ・従者 アイ・東光坊の能力

大鼓 佃 良太郎 太鼓 桜井 均

小鼓 田邊恭資 箕 中谷 明

山下浩一郎

後見 粟谷幸雄 内田安信

地謡 佐藤寛泰

友枝真也

中村邦生

出雲康雅

金子敬一郎

附祝言

(終了予定五時頃)

《小督（こごう）》

高倉天皇の寵愛を受けた小督の局は、中宮が紹介して御所に上がらせた琴の上手だった。中宮の父である平清盛が天皇の寵愛を受けていることを怒っていると知り、畏れて宮中を去る。帝は、小督の失踪を嘆くが、嵯峨野にいるらしいとの噂を聞き、源仲国に小督を訪ねるように命じる。仲国は笛の名手として、御所で小督の琴と合奏したことがあった。折しも今夜は八月十五夜。今夜は名月なので、小督が琴を弾くだろうと考え、その音を頼りに探しに出掛ける。〈中入〉「牡鹿鳴くこの山里」と詠まれた秋の嵯峨野は月光に澄み渡り、その中を

仲国は天皇より下賜された馬で駆け巡るうちに、法輪寺付近の片折戸の小邸から琴の音が聞こえてきた。それは夫を想つて恋う想夫恋の曲だった。しかし小督は宣旨だと聞いて仲國に会おうとしなかったが、仲国は小督に帝の御心を伝え、返事を受け取る。そして仲国は名残の宴で舞を舞い、やがて都へ帰つていった。

『咲華（さつか）』連歌の初心講（初心者の勉強会）の当番になつた主は、都の伯父を連歌の宗匠に頼もうと、太郎冠者を迎える。太郎冠者は伯父の顔も家も知らず大声で探して歩くので、「見乞（みごい）の咲華」という有名な詐欺師が伯父になります。太郎冠者が咲華を伴つて帰ると、正体に気付いた主は人違ひをわび、穩便に咲華を都へ帰そうと太郎冠者に言いつける。ところが太郎冠者は咲華との応対で失言を繰り返し、見かねた主は自分の言いつけどおり行動するよう命じるが……。

《六浦（むつら）》

都の僧が、東国行脚の道すがらに六浦の称名寺を訪れる。周辺の山々の紅葉が今を盛りと見える中に、本堂の庭に一葉も紅葉していない一本の楓の木を見つめた。不審に思つてみると、どこからともなく一人の女性が現れその理由を語る。昔、鎌倉の中納言為相卿がこの寺に紅葉を見に来たときに、他の木より先立つて紅葉していたので一首の歌を詠じた。

《黒塚（くろづか）》

祐慶の一行は回国行脚の途中に安達原に着き、一軒家を見つけ宿を乞う。招き入れた女は旅のなぐさみにもなりと糸車を回して見せながら人間のはかなさを嘆く。やがて夜が更け寒さが増したので、薪をとつてくる間に閨（寝室）を見ないよう言い残して出掛けしていく。〈中入〉見るなりわれ余計に見たくなつてしまつた能力だが、祐慶は許さない。そこで祐慶が寝入つた後に見に行つてしまふ。すると、閨には人の死骸が散乱している。これを確かめた祐慶達は宿から逃げ出しが、先程の女が鬼女となつて追いかけ激しく争う。しかし、ついに鬼女は祈り伏せられて消え去るのであつた。

友枝真也